

「自己表現力」と「実践力」を育成するための指導の研究 ～かかわり合って学ぶ活動をとおして～

1. 主題設定の理由

本校では、これまで「生きる力を身につけるキャリア教育に関する研究」を研究主題として、キャリア教育を総合的な学習の時間や道徳と関連させて「生き方」そのものの学習に発展させてきた。現在の本校生徒の実態として、素直で明るく真面目であるが、T.P.O に応じて自分を積極的に表現する力や自ら判断して進んで実践する力に欠けているという指摘が多くあった。そこで本年度は、昨年まで積み上げてきた教科道徳・キャリア教育の研究をさらに進めながら、自己を表現する力や道徳的な実践力を育て、自己実現出来る力を育てることを目標とした。そのために教科、道徳の時間、学級活動、特別活動、総合的な学習とキャリア教育、また日常のあらゆる場面において、自己表現力やコミュニケーション能力を育てるための具体的な手だてを講じ、道徳的实践につながる力を育てたいと考え、本主題を設定した。

2. 研究の内容

- ・授業、特別活動、行事、日常生活など、様々な場面で生徒の自己表現力やコミュニケーション能力、実践力を高めていけるような指導の在り方を探って来た。
- ・授業研究もそこに焦点を当てて実施した。

美術科 谷澤 糞子教諭 道徳の時間 内田 貴之教諭
国語科 依田 久幸教諭

- ・なお、本年度は、事後の研究会をワークショップ方式（付箋紙法）で行った。
- ・また、生徒会活動、生徒指導部とも連携してあいさつ運動等を展開した。

(1) 「自己表現力」を高めるために

自己表現力とは、自らの内面の思い・考え・願いを外面に表出する力である。それは単に書いたり話したりといったことに留まらず、身体表現や絵や造形物での表現も含まれる。自分の思いや考えを伝えたいという意欲は、ひいては豊かに生きるということにも繋がる。この力を仲間と関わりながら伸ばすための取り組みとして、ア、それぞれの授業で、生徒たちが話し合ったり発表する場面を、必ず採り入れるように心がけた。

また、短学活での1分間スピーチ等の活動に取り組んだ。

イ、「適度な声の大きさで」「相手（聞き手）の目を見て」「考えをしっかりと伝える」習慣をつけるよう、共通理解を持って全校体制で取り組んだ。

(2) 「実践力」を育てるために

道徳的実践力を育てることは教育の根元的な課題であるが、挨拶や授業規律、清掃などにしても、単にマニュアルを教えればよいのではなく、T.P.O.によって臨機応変に対処出来る力を付けてやらなければならない。それこそが「生きる力」であり、本校がこれまで積み上げてきたキャリア教育が目指してきた力である。

ア、道徳の時間を充実させ多くの道徳的価値に気づかせるとともに、日常のあらゆる場面でモラルを高めるよう指導した。

イ、キャリア教育として取り組んでいる福祉体験や勤労体験、また進路に向けての取り組みや校内外の諸行事等を、コミュニケーション能力や自己表現力を活用する機会とした。

(3) 「かかわり合って学ぶ」～根底に必要なのはコミュニケーション能力

自己表現力や実践力を育てる根底として一番大切なのは「関わり合い学び合う」活動である。学校生活のあらゆる場面において、自己以外の人びと（教師・同級生・異年齢の生徒・外部の人等）との交流をとおして学ぶことが「かかわり合って学ぶ活動」である。そのためには円滑な人間関係や「コミュニケーション能力」（他者と言語及び非言語メッセージの交換により相互に影響し合い、情報や思考、感情などを共有しつつ目的を遂行する力）であり、その育成のために次のような場面を設定した。

ア、各教科の授業で、小集団による話し合いの場面や、共に活動する場面の設定。

イ、本校が独自に行っている地場産業や祭礼等地域の人びとと接する場面。福祉体験、勤労体験、職場訪問等、外部の方々と接する場面の設定。

※なお、教職員自らが円滑な人間関係を築くための理論と実践を学び生徒に還元出来るように、精神保健福祉士・町田悦子先生を講師として「エゴグラム」や「アサーティブトレーニング」の研修も行った。

3、成果と課題

- ・コミュニケーション能力や自己表現力の育成は今日的な課題であり、キャリア教育や地域との連携に力を入れてきた本校に合ったテーマであった。
- ・年度当初に比べると、生徒のあいさつは向上している。しかし、授業中のあいさつや返事、発言の声の大きさ等にまだまだ課題がある。表現の技術と同時に、自分の思いを「伝えよう」「伝えたい」という意欲が高まるような工夫と取り組みを、継続して研究していく必要がある。
- ・授業研究は、各先生の小集団による話し合い活動や発表の場面を参観することが出来、各教科の垣根を越えて、共通の研究を進めることが出来た。また、ワークショップ方式の導入により、ひとりひとりが積極的に研究に参加するようになった。特に若い先生方が各観点のリーダーを担当することで、活発に意見を言えるようになった。
- ・マニュアルを作り指導するなどして、話し合いや発表の質を高めていく必要がある。

(研究主任 網野 勝朗)